日記抄

大下藤次郎

から、 ち 鳥類の研究に從事せらるム獸醫學士內田清之助氏に逢つた、 は最も賛成を表する一人である。 活きたる粧飾である。 彩を放つものもあるが、鳥には及ばない、 凡そ動物間に在つて、色彩及音聲の美なるものは實に鳥類であ ある。また保護されてゐない鳥でも、全部害鳥といふのではない は最も多く鳥類を捕獲すると同時に益鳥の多分をも捕 益鳥といふものも年々密獵其他の為に其數を滅じてゆく、 0 益鳥として保護さる」ものは三百餘種に過ぎない、そして其 話によると、日本現在の鳥類の種屬は六百餘であつて、 昆虫には其色彩の美はしいものは多いが、 其聲の美なるものは数が少ない。 出 來る事なら一切の鳥類の捕獲を禁じたいと言はれた』 私は美術家といふ立場より、 魚介獸類等、 實に鳥類は自然界の いかにも形が小 鳥類保護に 稀には美 へるので 其ら 氏

の繊弱なる小鳥を追かけ廻す男らしからぬ所爲を憎むと同時雑誌に、『其携えたる二連銃をしてステッキに代へしめよ否三脚雑誌に、『其携えたる二連銃をしてステッキに代へしめよ否三脚な敬で宗教家を氣取つて無益の殺生を忌む故のみではない、かて、この可憐なる小禽をして、徒らに散彈の的となすことなく、天地間を自由に舞はしめ歌はしめよ』と叫むだことがある。私は敢て宗教家を氣取つて無益の殺生を忌む故のみではない、かの織弱なる小鳥変。追かけ廻す男らしからぬ所爲を憎むで、新聞に私は、管で小鳥類を狙ひ廻る遊獵家なるものを憎むで、新聞に

らである。(六月九日)

少しく語る。
雨ふる。横濱支部の研究所へゆく、稽古終りて後『水』について

一日も早く恢復を祈る。(六月十一日) 何にして病を得られしかを怪しむ、健康は人生幸福の源泉なり、友人眞野紀太郎氏入院の報あり、氏は平素極めて壯健の人、如

劇の寫眞をまづ第一に除いて貰ひたい、支離滅裂なる脚色や、 ど喋々と議論もあるやうだが、私はそれよりも、 られて、紅白の燈光館前 と銘らつたる活動寫眞の建物は、無數のイルミネーショ 正 も起らず、 つておる、 不自然なる登場人物の動作を、 活動寫真は、 男の望むま」、用達の歸りを淺草公園に入つて見る、 淺薄にして低級なる藝術は、 却つて嫌厭の情を催さしむるのみである。(六月十三日) 現時都鄙を通じて大流行である。 の池水に映じたさまは頗る美觀である。 僅かにシーンの變化によつて補 幾度見た處で 教育上の利害な 詰らぬ 何の 時代演 何々館 快感

だと思つた。と相撲といふものは繪を畵く人にいろくへの教訓を與へるもの相撲を好む友がある、來つて相撲道の話をする、その話をきく

現蛇尾に終るものである。 見てゐて一瞬間の滕負でも、彼等は全力を盡すものであるから、 非常な疲勞を覺ゆるものだといふ、そして勝負が長くなる時に が足らなくては大作も出來ず、また一枚の繪を仕上る上に於て が足らなくては大作も出來ず、また一枚の繪を仕上る上に於て が足らなくては大作も出來ず、また一枚の繪を仕上る上に於て が足らなるでは大作も出來ず、また一枚の繪を仕上る上に於て が足らなるでは大作も出來ず、また一枚の繪を仕上る上に於て が足らなるでは大作も出來ず、また一枚の繪を仕上る上に於て が足らなるでは大作も出來ず、また一枚の繪を仕上る上に於て が足らなるでは大作も出來ず、また一枚の繪を仕上る上に於て がといふ、繪でも平素の修養

りながら、製作の旨くゆかぬ畵家もある。れの土俵によく負けるものがある、デッサンが馬鹿に上手であれて土俵には場處運といふことがある、また稽古相撲に强くして晴

手先の器用のみでは立派な作は出來ない、頭が無くては駄目で役には容易になれぬ、况んや横綱をやである、繪でも熟練や小と否とは、その内に含む活氣の有無によつて定まる。 特氣の充實は相撲に勝つ大原因である。繪畵の製作に於ても、

性質として、 見てゐれば多少 に見物することはあるが、 相撲取の全盛期の 私の父は相撲が好きで、 頃 私 もよく連れ 勝つたものに手を打つて喜ぶよりは、負けた方に の興味を覺えぬこともないが、 短かいのも、 5 れ て見た事がある、 毎場處九日を通して見物した、 自から思ひ立つて往つた事はな 書家の生涯とよく似てゐる。 今日では何 例の勝負嬢 かの機會 幼少 ひの

あ

る。

度初學者が書題の見つからぬやらなものであらう。(六月十六日) がある。併し新聞紙上、特に朝日新聞の評話を讀むことは好きで、ある。併し新聞紙上、特に朝日新聞の評話を讀むことは好きで、 気の毒に思ふといふのだから、到底相撲を見る資格はないので

n て、 來る、 りて、 買つて歸るといふやらに、 所謂油照りの蒸暑い日であつた。 木氏と共に朝八時高橋の通運待合所 にそれを買つて歸るかも知れない。 ちらでもこちらでも盛むで、丁度遊獵家が獲物が無 正男が鹽田を見たいといふので、スケッチ旁々行徳へゆく。 それを銀貨釣とよむでゐる。繪かきのよく集まる房洲 釣道具を手にした人達で一ぱ スケッチを賣つたなら、 二神嬢が來る、八時半に船 釣師目あてに魚を賣つてゐる處があ 下手な先生達は、 船 は出た。 いである、 の中は ゆくと、 相 釣に關する話は かはらず やがて渡邊 自 分で いと鳥屋で 0 描 日 かず あた 君が 曜 鈴 あ

歸り、 海岸へ出で、 中で晝食をした、二神嬢は少し暑氣にあてられ さしてゆく、 舟行三時間に近く漸く行徳に着いた。町を抜けて田の畦 處に休むでゐる、 德願寺に菖蒲を見て、徒歩一里中山停車場より汽車で夜 東京灣の干瀉を寫すこと二枚、 日はぢりく照つけて中々暑い、 私達は丈より高き芹をかき分けて、 やがて元の行徳 とある松の林 て寫生もせで此 堤 監を海岸 0

に入って歸宅した。

寫生地として優秀の場處といふことが出來やら。(共月十八日) クッチの出來る處である。東京に近く、交通も便利であるから、人日の色がよく、空には必ず雲があつて、いつも心持のよいスのと異つて、何となく重い暖かい心持がある、そして此方面はいづれも同じやらな感じであるが、品川や大森あたりから見たいづれも同じやらな感じであるが、品川や大森あたりから見たいがれる。

たのみで、幸に他に損害はなかつた。
前夜來近年稀なる大暴風雨であつたが、庭の樹木が二三本倒れ

月十一日より三十日迄と極まつた。中央にして四月廿日より一ヶ月間、日本水彩畵會は北部中央九に臨んだ、來年度展覽會場は、抽籤の結果、太平洋畵會は北部年前滿谷氏を訪ひ、午後からは上野韻松亭に竹の臺茶話會總會

ちに勝負がついて呆氣ないものであつた。 宮ふや否、一溜りもなく飛ばばされてしまふ、力を出さないら 三の連中が來て相撲が始まる、未醒君を相手とした青年は、立 足袋跣足になつて一生懸命にテニスをやつてゐる、そのらち二 とのきないら

い眺めになるであらう。(六月二十日)も、數百本垣に接して植えられた、五年後十年後は嘸かし美しも、數百本垣に接して植えられた、五年後十年後は嘸かし美し

柏木に三宅氏を訪ねた、座に一客あり、此夏の旅行につ るやうな事はあるまいと、三宅氏と語った。〈六月二十一日 つても充分内輪に見つもつて旅行したなら、少なくとも失望す 他人に何處がよいとか惡いとか斷定的に指圖されるものではな なかつた例もある、自分でさへそのやらに極められぬのだから、 同じ景色でも時間と季節によつて甚しく感じが變つて見えるの に悪いこともあり、朝夕に面白くつて晝間は詰らといふ風に、 とか極める事が出來ない、 された、 とまるで趣きが違ふ、雨の時や曇つた日によくつて、 である、それで、前に一度見た處でも、二度目に往つて面白 まア他人の話などあまりアテにせずに、そしてよい處と思 一タイ景色は人々の趣味によつて何處がよいとか 風の無い日の湖水は、 波の立つた時 晴れた時 き相 談

の依賴物と異なる意味に於て光榮を感じ、快よく承諾した―― との議が起り、H氏は、其繪の揮毫を私に托された、私は普通との議が起り、H氏は、其繪の揮毫を私に托された、日夕生徒をして清新の氣を養ふの用に供してゐられる、其感化か、近頃をして、紀念のため一面の水彩畵を得て、其校に永く留め置かんとの議が起り、H氏は、其繪の揮毫を私に托された、私は普通との依賴物と異なる意味に於て光榮を感じ、快よく承諾した――との依賴物と異なる意味に於て光榮を感じ、快よく承諾した――との依賴物と異なる意味に於て光榮を感じ、快よく承諾した――との依賴物と異なる意味に於て光榮を感じ、快よく承諾した――との依賴物と異なる意味に於て光榮を感じ、快よく承諾した――との依賴物と異なる意味に於て光榮を感じ、快よく承諾した――との依賴物と異なる意味に於て光榮を感じ、快よく承諾した――との依賴物と異なる意味に於て光榮を感じ、快よく承諾した――との依賴物と異なる意味に於て光榮を感じ、快よく承諾した――との依賴物と異なる意味に於て光榮を感じ、快よく承諾した――との依賴物と異なる意味に於て光榮を感じ、快よく承諾した――との依賴物と異なる意味に於て光榮を感じ、快よく承諾した――との依賴物と異なる意味に於て光榮を感じ、快よく承諾した――といる。

小學校の諸君に滿足を與ふべきやを氣遺ひつ」。 私の凡手は、如斯由來つきのものに對し、よく**H**氏、並びに某

想起し、同じく教育に從事せらる」人にして、 稽の感を覺えた事があつた。 らうと思つたら、矢張受持の人が在つた、そして此縣が美術の と同 あるものかと疑はれた。(六月二十四日 應用を最も必要とする、有名なる漆器産地であるので、 私は、このやうな學校には、畵學教師は多分缺けてゐるのであ その心持を綴る文章は、實に繪畵よりもより多くの役目に從ふ 事もあらう、併し如斯事を云ふたなら、其繪葉書にかく文字、 私は思ふ、繪畵を畵くといふ事は或は男女間のある役目を爲す みならず、生徒に命じて一人も講習會に出席せしめなかった。 事は繪葉書にありとの理由から、 長某氏は、繪畵を學ぶは墮落の第一歩にして、青年男女間 嘗てある縣にて水彩畵の講習會を開きし時、 である、 書を讀むはやがて文章を習ふもの、是又禁ぜねばなるまい、 一視 し、其校の職員をして會務に闕係することを禁ぜしの 何故に此學校に於ては、文字を書くことを禁ぜざる 偶々出氏に逢つてはしなく此事を 淺薄なる繪葉書を以て水彩畵 其地の師範學校 如斯心事 寧ろ滑 相違 0 醜

ので、小山、水野兩君を煩はして、一時間あまり朗讀して貰つ後、折から『みづゑ』にあてて送られた丸山氏の通信が到着した相田、尾崎、諸君の作に目を惹くものがあつた。批評が終つて午後から水彩畵研究所の月次會にゆく、出品畵六十餘枚、水野、

用事ありて中根岸に中村不折君を訪ねた、中村君は折抦日本畵の筆を執られてゐた、西洋畵は金にならないので、今では本職が道樂にない、最も繪は道樂でなくてはよいものが出來ない筈だから、自分の本領の西洋畵で生活せぬことは、却て仕合せかも知れないといふて笑つて居られた。

日は、畵といふ字、着といふ字、其他二三の説明を聽いた。中村君を訪ねると、いつも文字の上に於て何か學問をする、今

タ刻、『みづゑ』に借り受けた**ブローヂ**及びナイル河の水彩畵を はれる、『みづゑ』讀者も定めて望む處であらうから、私は氣の はれる、『みづゑ』に借り受けたブローヂ及びナイル河の水彩畵を のために、蘇國に於

いふ事になつて面白くない、それに、兩氏共既に雜誌や新聞にれても文章でも、真の色も見られなく、真の聲もきこえぬ、賴をのでなくては、真の色も見られなく、真の聲もきこえぬ、賴をかが通信やら所感やらを寄せられるやう賴みたかつた、併し、何か通信やら所感やらを寄せられるやう賴みたかつた、併し、何かづゑ』のために――三宅君が外遊さる、時も、石井君の時も、

それ 2 羅馬より、 ナス 通 話がある、 信を約されてゐたのだから、當時私は何とも言はなかつた、 にも 數枚の原稿とを送られ、 拘はらず、『みづゑ』に對 『みづる』は實に幸福の見である。(六月二十六日) 中を『みづゑ』のために書いた一葉のスケッチ いままた三宅君からも、 して同 情厚き石井 力君は、 この

H

來つて、 するのであるから、 りしてゐた、 きも から、 帖は何處、 を、 北山 上は飽迄注文主の便利を主として、 價にして且早く手に入つたと喜ばれた禮狀二三を示され 不 るから、 るものを設けら 經驗から、 賴 困 便と不經濟は免かれることが出來ない、 んで置た。 つてゐるのに、其上そのやうな監督は出來ぬから、一々お斷 のを設けるやらに御望みがあつたが、 繪の事を碌に知らぬ商人の手によつて品物を求むるのであ 清太郎氏は、 春鳥會へ宛て、 注文の景況を語り、 いつも満足な供給を受けない、そして繪具は何屋、 書物は何社と、 地方の修業者の便利を圖るべく、 今度の北山君の仕事は、 れ 研究所通學の餘暇に、 太に便利であらうと思ふ、今日、 種々なる買物を托され、 實に地方に在つては、 一々別々に注文を發せねばならず、 又迅速に品を送つた方々から、 滿足を與ふるやう吳々も君 丁度代理部と同 常て不便を感じた苦 今でさへ仕事 地方の『みづゑ』讀 洋畵材料供給會な 自分の欲するも また代理部の如 北山 じ役目 ずが多く 君 安 此 書 は 者

> 見てH氏は 來訪を求め が置かれてある、 私もまたそのやらに思ふ、 を求めるやらに、 まりに讀むものが多過るため、 になる程、 いといふ、挿繪の多くなつたのは流行のやらに思ふが、 氏は近々歸校せらる」により、 からも生理上からも必要を生じた結果だらう』と云はれ 繪畫の如きは確に必要の度を増すべきであらう。 て、 『近來は新聞でも雜 種 挿繪によつて慰籍と休息とを得るので、 雑誌には必ず口繪があり挿繪がある、 々趣味ある物語をした。 世が複雑になり、 丁度脳を使つた後に新しい 誌でも挿繪が無け この日の書餐を共にず 卓上 人生の行步が困 には数 ば賣れ 種 實はあ これ 心 た。 空氣 を

上

65, 枚のマットは一枚も再び使用することが出來なくなつてゐた。 構はずマットの上に鋲の穴があいて居る、 亂れてマットの一部を汚した、 には紙を剝した跡が、 の名とかを、 マットは一枚 た、それが今日戻つて來た、 ある處で展覧會を開くからといふので、 併 何等の考もなく、 穴の周圍四五分徑に赤く圓くなつてゐる。 厚意上貸してやつたものに對して、 紙に書いてそれを貼つたのだらう、 二三十錢 で新しく 買 二三分の幅で二筋つづ殘 マットの上から留鋲を打つたらしく、 挾みの締糸が濡れて、 それはよいが、 へるものだからどうでもよ 四 鋲は錆てゐ 五 枚 如斯非常 繪を壁に吊 つてゐる、 の水彩畵を貸 書題とか 色マット 紅 い染 たの 筆者 料は 此 時 だ

ることが出來なくなる、今回の所爲の如きは、 如斯取扱を受けたのでは、 益する事なら、誰れにても自分の繪を貸すことを拒まな 催も實に滑稽ではないか、 扱を爲すといふことは、繪をかく人として許すべからざる事だ に一大妨害をなしたものと云ふてもよからう。 縮は如 何に取扱ふべきものかを知らすして、 私は地方のために、美術趣 今後は知人ででもなければ求に應ず 實に趣 展覽會開 味普及に 味普及の いが、

返さぬ、 捨てたともあった。またある展覽會に貸したら、いつ迄經ても 糊つけ用に使ふたゝめ、畵面に凸凹が生じて、終に一枚を破り 意して欲しい。 繪を貸す上には、多少の損害は覺悟の上であるが、 口するのである。 人集まつて摸寫してゐたのだといふ、摸寫をする事は咎めない、 應の時日に返す事が出來ないなら、此方の承諾を求むるがよ 徒らに手数と迷惑をかけさせられるのには、 段々催促を重 中には大切なものもあるのだから、 先年も同様などがあつた。甚し ねたら、 一週間 一度の日曜の いのは繪の裏を、 注意の上にも注 いつもく とに角 休みに、敷 私に

辭を低くして繪を借りて置 は、むしろ通例であらうから、 繪の取扱方も少しは知つてゐても損ではあるまいと思つた。 い部屋にガラスなしで懸けて、盛んに煙草を吸ふたりする 書面に窓から日光の直射するのを構ばず置 ながら、一番暗い廊下の隅などに 今更彼是は言は ぬが、繪を畵く人 並

(六月三十日)

7. 筆が往き、それをたぐ淡くとか濃くとか區別して着色するまで 寫生を試みても上手になれるものではない。(七月一日) 自分極めの綠色を持つて來て、自然の色をその方に一致せしめ も此人の如きは、緑を見るとまづいつも使ひつけの繪具の處へ ての色彩の中で一番ムヅカシイものとしてあるが、それにして 近い變化も現はれず、 色が單調である、 圖 あ ですといふて苦笑してゐられた。研究といふことなしに、 やらとしてゐるのであらら、此事を說明したら、全くその 一柄もあり、 る人が、 自然の色を見て後に、繪具の選擇混合を試むるのでなく、 數枚の繪を携へて來て批評して欲しといふ。 巧みに書いたのもある、併し残念な事は、 特に時節柄、 又種類も畵き別けてない、 緑の色が一定てしてゐて、 綠 の色はすべ 何れ 面 何枚 通り 白

なるが、 支部の研究所が、保土ケ谷から横濱へ移つてからこれで三 いつも雨ばかりである、 今日も批評を終つて後ち靜 回に

は苦し 下手なものを相手にするのは面白 寫生をやらせた。 なれない、 から、 吉田君は不相變私に碁をやれといふ、 勝負事の嫌ひな性質だから本氣になれない、 伊豫屋に いつ迄やつても上達はしないに極まつてゐる、 開かれた太平洋畫會の展覽會委員慰勞會に か知らないが、 少し自分より 相手になる方 熱心に

夕刻

は勝負といふことを重きに置かぬ無邪氣 なもの が面白いと思

とは言ふ迄もな と客にせまる、 大妓小妓、 が無い、 ともす 間 會の を周 ば歸 人は 旋し、 1) たい あるも 仕度をする、 才 1-0) ナシ過ぎる、 は撥を扣 私もその へて、 一人であるこ 誰 連り れも 騒ぐも K 唄

それは昔しの通人とやらがした事だと云つてゐた。(七月二日)聞いてゐたら面白からうと思ふ。ある人にその事を言ふたら、でも買つてもやり、大妓に浮世話でも勝手にやらせて、默つて妓を聘して、舞はせ唄はせ、そして後に、小妓に欲しがるもの

が批 洋畵には 雜誌 人の 何に苦心しても歐米の が出來ない、 大と崇高 新日本』を見る。 風景 すごき玄海 手に成つても深さが違ふ、 私が氏 た 其要は K 向 は變 ど自然の かくるゝ臺灣 がない様たといはれたが、 0 趣を藏してゐな に語っ 化が多い、 日本で描 「某畵伯は 0 沖、 威力が示す深趣を探つ 樋口 た風景論 空間 0 風景畵のやうな厚味 いたものと西洋で畵 森林、 樺 龍峽 日本の 太北 の觀念に捉 氏は 0 朔 海 0) 日 山水は薄べらで奥行がない、 かっ 風吹すさぶ北海 0) 本の風景は日本 節 「日本の山 林野、 H K 本の こゝには つき、 はれず、 たなら、 風景は果し H いたものでは、 のある深刻なる 本ア 所感を陳 水と繪畵 大小の 疑 12 到る處に壯 の海 問 畵 があ に適 ブスの高 比 て奥深 べら 鬼火 較を と題

尤も適 景は鍾 畵の形式の上 關東地方で、 弱からず强からず、また明暗 くして强く且 鋭く弱い、 中 方、越後から、秋田青森、 るが、 を氏 5 深味が乏しい。日本の風景を感じの上から大別すると、 日 いて、 n 説に服するものであるが、 本の風景觀を述べ大に氣を吐かれてゐる。 罵るべきか、 平 0 國方面、 奇峭 本の風景の、 K 坦 と崇高 私は『新日本』 なり は誤解してゐられたやうである、 短時間の談話で、 **尚氏に御話しやらと思つた意味は、** 少しく研究してゐる事がある、 まつて神州にありと云へる、 富士 日本繪の發展 てねて、 淺薄なりといふのは、 の趣はある、 九州 京都以西、 御線赤 にあては 兩毛甲信、 重 凡庸畵工の多きを笑ふべきか」と、こんな胃 0 是迄絕景とし いやうで、 大部及 明るく奥行なくパ 石等の雄大、 の紙上を拜借して發表したいとも の見るべ めて見ると、 九 旦私の話しやうが悪かつたため、 吉野松島嚴島の優美、 東海道の一 四 北海道の方 州 その中庸を得 國 0 たい私が、 の一 て きも 部、 上にも適度であるの 世 何の為であららか、 其 部は 人に知ら 瀬 他 部 ツとしてゐる、 のあるは 面は、 四 厚みも深みもあ 何々と列 知ら 戶內海方面 である、 國 甞て氏に語 私はいま日 一二年の後考が纒まつな 0 暗くして鈍く 私の所感で云へば、 れてる處は、 私は な 部は、 偶然ではな 重 神居古潭耶馬 記し からず 2 が れを現今の った時、 は 體 本 たら 京都 は 明るくし の風 歴に於て 日 輕 Sty. 思つてゐ 日 本 東北 概して を中 本繪 分明 私の 中 からず 重 自 あ 自 特

理由 が るる る 悪いといふこともなり、 本畵にしてはやゝ强過るし、 西洋のある地方に似てゐる、 て必ずしも重い深いものばかりがよいとは云 る水彩畫が、 式でも、 當な畫風は無いやうに思はれる、是に反して、東北地方となる 水彩畫といふ形式を持つて來て寫すに適してゐ た次第ではないといふことが分らう。氏はまた、私共洋畫家が に須摩舞子あたりの景色は、日本畵以外、あの感じを出 敢て日 ふも ふ事 る。この意味を以て、 方の風景を畫いて出品したら、 處は油繪の領域であつて、 ある感じ、 最早日本畵は何ともすることが出來ない、 處の山 私は日本の風景を以上のやらに觀察し、最も中庸を得て は、 材料の適否は其製作に影響する處多きは言ふ迄もな 物を寫せぬ事はない、油繪で日本畵的 刎 に對 につ 本の風景を貶しめ 通常惡 ねられたといふ説さへある程、 水美に富む 物と物との輪廓が明らかでなく、何となく重 一番適當であるのだといふ論に結着させたいの いて一言したいけで、 い意味にとるのが至當ではあるが、 潚 洒淡白 中部方面を描くに、 前の樋口氏の説と對比して見たら、 日本畵で重い處が畵けないといふ譯も たのでもなく、八淺薄、 ひとり中部關東方面の 昨年の公設展覽會に、 といふ風に評してもよからう)た 油繪としては少しく重過る、 外國の繪の模寫だらうといふ 敢 て外國の それ程風景の感じが 私共の主 へぬ、 0) 暖しくして深味 風景に肩を持 る。 の場處を畵 深味の無 或人が秋 由來何の 重厚深遠と 山水は、 すの 一張してゐ 風景とし 丁度 K いて 私 日 形 田

> らぬ、 書 30 る として、 瀬戸内海方面は らに解されてゐるが、 の日本畵が、 幽玄も、壯大も奇峭もはた優美も瀟洒も淡白も輕快もあらうが 如く日本の風景は多様多種、 るといふことを知つてゐて貰ひたい。 面 V 般から言へば、 いて見たいと思つてゐる。「七月三日」 の上に作爲し變更しやうと思はない、 かに苦心して深味を現はさらと思っても出 私はまだ北海道を知らぬ、 深い處を淺くするといふやらな、 他日其地方を親しく觀察して、 重厚が必ずしも可である 私は風景に對して極めて客觀的態度を持する一人であ あの地方を寫すに當を得たものだと信ずるのであ 一層深味と厚味が無く、 氣候の關係か、 他は知らず、 極 九州の大部を知らぬ、 めて變化に富むでゐて、 といふ意味でなく―― 島國的で重 私は淺 要するに、氏も言はる 自然から受ける感じを畫 私の感じた日 その 丁度それに適 い場 事の 厚の趣が缺けてお ない 處を特 可 否は別別 本風景論 臺灣を L 更に深く た形式 特に、 3. 問 た

廣々とし りて多少の畵材はある、 生を得て夜分歸宅した。 鈴木氏、 渡邊氏、 た景色が見られる、 竹内孃、 船橋は行徳より 町の後方小高き處へ上れば、 正 面 男等と共に船 白 V 松 原もあつ \$ 海岸に近 橋 へゆき、 (七月九日 東京灣 四 船もあ 枚

* *

*

*

*

*